

大雪が心配された2月9・10日、当学会主催の研修・講習会が皆様の適切な備えにより予定通り開催され、例年を上回るご参加をいただきました。御礼申し上げます。

3年間のテーマ「人と音楽を探求する—音楽療法における臨床的な視点—」による最終年度、1日目は「研究」を取りあげ210分という時間をかけじっくりと学びました。A会場：児童領域（講師：高山）では、研究の基本的な知識を整理し、その後「量・質・混合研究」に挑戦しました。特に質的研究では、最近よく用いられるグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を参考として分析し混合研究に繋げる作業をしました。尚、2019年大阪大会講習会にて「本部企画」としてGTA入門の講義を企画しました。ご期待下さい。

B会場：高齢者領域（講師：森川氏）では、基礎研究と実践のつながりについてアクティブに学びました。私たちの「実践の効果を、どのように研究につなげるか」という必要な課題について、データの取り方、比較の方法、脳機能の問題、セッションレポートの書き方を学び、後半では、視聴者が実際に前に出て、白板に自分の実例を書くというワークショップも行いました。多くの質問も交えて、内容の濃い時間となりました。

2日目は外部の先生方による講演・演習が行われました。1コマ目、河瀬諭氏には映像を用いて、音楽が何故コミュニケーションとして成立するのかについて、「音楽すること」と体の動き、共同性や共感性という視点から検討し、最終的には「音楽の恩恵」についてまとめていただきました。

2コマ目松田昌氏による編曲のワークでは、3割程の方が鍵盤ハーモニカを持参され充実した実践が展開されました。前半は、ペダルポイントと三度に四度を重ねる三和音（ハ長調の場合：ミソド）の並行移動奏法や非和声音を用いて、“ホルストのジュピター”など豊かなサウンドの作り方を学び、後半は「カエルの合唱」を変幻自在にアレンジしながら、仕上げは7名の方に登壇いただき“カッコウやウグイス”などの創造的な表現をイントロとして壮大な「カエルの合唱」が演奏され拍手喝采でした。そして最後は、あの名曲「りんご追分」でシメとなりました。楽しいトークを交え、充実した90分でした。

最後のプログラムは細馬宏通氏の研究の一端をご紹介いただきました。細馬氏は、人間の行動（身振りや視線）と音楽の研究をされていますが、先生のトロンボーンと障がいをもつA君のドラムとのインプロビゼーションの映像から、心の動きまで量・質的に分析し解説して下さい、さらに介護現場の映像では、車椅子からベッドへの移動介助の場面において、介助される人と介助する人の間で「何が起きているのか」を時間軸という量から質的考察をするというリサーチ・クエスチョンからアンサーを見出す興味深い分析を垣間見ることができ、音楽療法研究への可能性を大いに見出すことができました。

私たち音楽療法士は、理論・実践・研究をこなすことにより深められていくものと思います。その中の「研究」というテーマをできる限り創造的に、そして充実感をもって取り組めたらと思います。今回の研修・講習会で紹介された考え方や方法を基に是非チャレンジしていただけたら幸いです。次年度も興味深いテーマを掲げ計画してまいりたいと思います。2020年2月8・9日、どうぞ、ご期待下さい。